

実践者、教育関係者にお薦めしたい本

加藤義信著『アンリ・ワロン その生涯と発達思想：
21世紀のいま「発達のグランドセオリー」を再考する』

瀬野由衣

本書は、本学の名誉教授である加藤義信先生が2015年に福村出版より出版されたご著書である。

この本で取りあげられているアンリ・ワロンという人物の名前を聞いたことのない人もいるだろう。フランスのパリ生まれのワロンは、発達心理学者であると同時に、臨床実践家であり、戦後には画期的な教育プログラムを提案し、世界の革新的な教育運動に貢献した教育学者でもある。本書の魅力は、ワロンの発達思想が表象発達論を専門とする加藤先生の視点から考察されている点にある。一見すると研究者向けの専門書のようなのだが、筆者は、特に臨床実践に携わる専門家や教育関係者にも、是非、この本を手にとって頂きたいと思っている。以下では、その理由、つまり実践者にとってのこの本の魅力について考えてみたい。

まず、本書を通じて国内外で初めて紹介されるワロンの伝記は、多くの読者に共感と勇気を与えてくれるに違いない。「子ども期を通じてのワロンは、際立って利発な子どもというわけではなかったという。むしろ、生涯を通じてのワロンがそうであったように、人一倍正義感が強く、それでいて人前ではシャイで、物事を深く自分の内部に受けとめることができる、感じやすい子どもではなかっただろうか」(本書、p. 17)とあるように、ワロンはシャイで控えめで、緊張しやすい人であった。しかしながら、それと同時に、戦争体験を始めとした厳しい現実や、実践現場で出会う障がい児たちに真摯に向きあう情熱的な人でもあった。

本書は、ワロンの人柄とその生き方に触れなが

ら、ワロンの発達論について理解することができる唯一の本といえる。

次に取りあげたいのが本書の要でもあるワロンの発達思想である。ワロンは、教員を志した後に医学の道に入り、40代に入ってから精神病理学と心理学の両者に依拠した独自の発達論の基礎を築く。ワロンの思想の特徴の一つは、病的な状態と健常発達を切り離して考えず、両者を統合して「人間の発達の全体像」を捉えようとした点にある。情動や姿勢-緊張系の機能を軸として、人と人が響きあい、つながりあいつつも、対峙して向きあう構えの中に人間の本質をみようとする視点は、鋭くかつ人間味にあふれた、現代的な問題提起であると筆者は考えている。

最後に、実践や研究に向きあう際のワロンの「思考の進め方」に触れておきたい。ワロンは、「何よりも複雑な現実の中にある差異や矛盾に目を向けた人」(本書、p. 103)であり、ある問題への対処法として「すぐに役立つ」実践的方法や解答を導きだす人ではなかった。しかし、問題となる現象を多角的な視点から深く掘り下げていく思考法には、多くの学ぶべき点がある。本書ではその一例として、「不器用」に対するアプローチの仕方が挙げられている(本書、p. 89~93)。幼児の不器用さを問題にする場合、まず、ワロンは、それが幼く未熟な幼児にみられるものとしてだけでなく、「時に大人においてみられたり、病的な状態(例えば、失行症)に至るのはなぜか」という点から、当該の問題(不器用)にアプローチする。そして、不器用という現象の様々な質的な違いを

区別し、それぞれについて詳細な説明を加えていく。さらに、不器用で問題になる「運動」機能の未熟さの背後にある「静止」という現象に着目し、「静止」という「対立項」との関係の中で「不器用であるとは、どういうことか」をより深く考えていくのである。このような問題へのアプローチ法は、例えば「多動とは何か」、「固執やこだわりとは何か」といった日常の具体的な事象を分析的に考えていくうえでの一つの指針となり得るように思われる。

実は、上記のワロンの思考の進め方は、加藤先生の思考法に非常によく似ている。ワロンから加藤先生が学びとられたのか、そもそも、二人が類似性を共有していたのかは定かでないが、加藤先生だからこそ、ワロンの思考法をこのような形で整理できたのではないだろうか。本書はきっと、物事の本質を捉え、その起源や成り立ちを掘り下げて考えていくことのおもしろさを教えてくれるに違いない。